

Title	ベルクソンにおける獲得形質の遺伝説批判
Sub Title	Critique de la théorie de l'hérédité des caractères acquis chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2023
Jtitle	エテイカ (Ethica). No.16 (2023.) ,p.109- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20230000-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける獲得形質の遺伝説批判

西山晃生

はじめに

「獲得形質の遺伝」、つまり生物が経験的に身につけた形質が子孫に遺伝するという仮説は、かつて大きな影響力を持っていた。ベルクソンは『創造的進化』（1907、以下『進化』と略記）および『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』と略記）においてこれを批判している¹。

しかし、『進化』の時代においてすら、この仮説は支持を失っていた²。ベルクソンがわざわざこれを取り上げたことには何らかの意図があったはずだ。本稿の目的は、二つの著作（とりわけ『二源泉』）において、獲得形質の遺伝を批判するときにベルクソンが何を目論んでいたかを探ることである。構成は以下の通り。第1節では『進化』における議論を確認し、ベルクソンがこの説の何を認めなかったのか明らかにする。第2節では第3、第4節の準備作業として『二源泉』における「閉じた社会論」を概観する。『二源泉』における獲得形質の遺伝説について、第3節では人間本

1 ベルクソンの生前刊行された著作からの引用は、以下の略号の後に *Quadrige* 版の頁数を付した。

EC: *L'évolution créatrice*, 1907 (『創造的進化』)

DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932 (『道徳と宗教の二源泉』)

2 「獲得形質の遺伝可能性は独断によって肯定された後、生殖細胞の本性とみなされたものからアプリオリに引き出されたさまざまな理由により、同じく独断的に否定された。」(EC 79)

性をめぐる議論との、第4節では未来への希望をめぐる議論とのかわりをそれぞれ論ずる。

第1節 『創造的進化』における獲得形質の遺伝

『進化』の第1章において、ベルクソンは当時の諸学説を「共通のテスト」(EC 85)によって検討する。ここで彼が求めるのは「複数の独立した進化の線上で、同一の複雑な構造が発達すること」(EC 69)に対する説明である。

さしあたり、問題を二つに分けることができるだろう。①諸部分が連携して一つの機能を実現する「複雑な器官」(EC 56)の形成、②遠く離れた種に属すると思われる諸生物が同一の器官をもつという事実、をそれぞれどのように理解するかということである。ここでは「偶然的／規則的」「内的／外的」というふたつの基準によって諸説が分類され、批判される。

ベルクソンによれば、進化の原因を「偶然的かつ内的な諸変異」(EC 55)に求める学説のうち、微小な変異の蓄積によって種の生成を説明するダーウィン主義は②、比較的少数の大きな変異に依拠する突然変異説は①の説明に(相対的に)困難を抱える(EC 65-6)。偶然による変異は、眼のような複雑な器官が、異なる進化の過程をたどった諸生物において同様に発達した理由を明かしているとは言い難い。したがって、偶然性を排し、定まった方向への進化を促す要因を導入する必要がある。しかし、「定向進化説」のように外部からの継続的な物理化学的影響によって変異が引き起こされると考えた場合、①も②も十分に説明することができない(EC 73-7)。こうして残るのは、「方向づけを行う内的原理」(EC 77)を想定する学説である。

ベルクソンはネオ・ラマルク主義を「現在の進化論の諸形態の中で唯一、内的かつ心理学的な発達の原理を認めることができるもの」(EC 78)として高く評価する。新しい種を生み出す変異は「自らに課せられた生存

の条件に適応する生体の努力そのもの」(EC 77) から生じる。その努力が進化を引き起こすのだとしたら、そしてその努力が諸生物の間で同一のもののだとしたら、異なった生物で同様の器官が発達する仕方を示す見通しが立つだろう (EC 78)。したがって、ネオ・ラマルク主義は②について有力な説明でありうる。

しかし、生体の「努力」によって得られたもの、つまり「習慣あるいは習慣の結果」(EC 80) は、それ自体として見た場合、とうてい複雑な器官の形成をもたらし、生物の進化を引き起こすとは思えない (EC 78)。この「努力」が進化の原因となるためには、ある性質が必要となる。それは、獲得された形質が子孫に引き継がれることである。こうして、ネオ・ラマルク主義の成否は「獲得形質の遺伝可能性」(EC 79) にかかっていることが明らかになる。しかし、ベルクソンはこれを事実とみなすことは難しいと考える。彼が指摘する困難は説明原理として採用することの不可能性と、遺伝可能性そのものの疑わしさに分けられる。

前者から先に見よう。ある形質が遺伝したとき、私たちはしばしばそれが獲得されたものであるのか、それともすでに個体のうちに存在していた自然な傾向であるのかを決定することができない。したがって、獲得形質の遺伝はたとえ生じていたとしても確認しがたい (EC 80-1)。

しかし、本質的な困難は後者の方にある。一見すると獲得形質が遺伝しているように思われても、実は同一の作用が体細胞と胚細胞の両方に影響をもたらしている可能性がある (EC 83)。仮に、体細胞の変化が遺伝的に影響を与えていたとしても、その効果は生殖質全体に及ぶと考えられる。したがって親が獲得した形質を子が同じ形で引き継ぐとは限らない。むしろその可能性は限りなく低い (EC 83-4)。こうして、獲得形質の遺伝は「例外によるものである」(EC 83) という結論に至る。ここで否定されているのは、獲得形質の遺伝そのものではなく、そうした遺伝の規則性である。何らかの変異が生じることを示したとしても、その変異の蓄積を説明できない点で、ネオ・ラマルク主義は他の進化説と同様の困難に陥るだろ

う。

ベルクソンは、進化の原因として「努力」を挙げた点でネオ・ラマルク主義を評価していた。しかし、その「努力」を個体の身につけた習慣に求めたため、この説は獲得形質の遺伝という例外的にしかありえない事象に依拠することになってしまった。結局のところ、問題は既に形成された個体を中心に考えていたことである。個体の努力によって種が進化することはない (EC 87-8)。したがって「努力そのものを掘り下げてより深遠な原因を求めなければならない」(EC 79)。それは「環境から独立し、同じ種の大半の成員に共通する」(EC 88) 努力である。ベルクソン自身の立場が示されるのはこの後であり、『進化』の議論もそこからが本番なのであるが、本稿の目的は獲得形質の遺伝説に対する批判を検討することであるので、『進化』の論旨をこれ以上追うのはやめ、「個体の努力の結果が規則的な仕方では遺伝することはない」という批判の要点だけ確認しておこう。

ところで、獲得形質の遺伝について検討する箇所ではスペンサーへの言及がなされていることは注目に値する³。

もしスペンサーが獲得形質の遺伝について問いを立てることから始めていたら、彼の進化論はまったく異なった形を取っていただろう。個体の身につけた習慣が子孫に伝達されるのは非常に例外的な場合に限り得るとしたら（私たちにはその可能性が高いと思われる）、スペンサーの心理学はすべてやり直さなければならないだろうし、彼の哲学はその大半が崩壊してしまうだろう。(EC 79)⁴

実際に、スペンサーの哲学がここまで獲得形質の遺伝という仮説に依

3 もっとも、スペンサーへのあこがれから対決姿勢へ転ずることによって哲学者として出発したベルクソンにとって、彼は常に意識してきた相手であり、名を挙げることも自他は意外ではない。

4 スペンサーへの同趣旨の言及が DS 290 にもある。

拠っていたかはさておき⁵、ここでは四半世紀後の議論が先取りされている。『二源泉』で獲得形質の遺伝がふたたび取り上げられるとき、批判されるのは生物の進化というよりそれに依拠する社会進化論であり、直接の標的となるのはスペンサーである。そして、獲得形質の遺伝をめぐるベルクソンの立場はスペンサーと対照の位置を占めることになる。だが、この点についてはまた後に見よう。

第2節 『道徳と宗教の二源泉』における「閉じた社会」論

『二源泉』における獲得形質の遺伝に関する議論を検討する前に、準備作業として本節では同書における「閉じた社会」の位置づけを確認しておこう。そのアウトラインは冒頭で一挙に提示されている。ここで示されるのは以下のような事態である。

人間は気づいたときには様々な命令を既に受けてしまっている (DS 1)。命令は自己の周囲 (親、教師…) から発せられるが、その元をたどっていけば最終的には社会という「極限」(DS 3) に行きつく。つまり人間は生きているというだけで常に社会からしかるべきふるまいをするよう求められている。こうした「社会の諸要求」(DS 17) をベルクソンは「責務」と呼ぶ。多くの人間は「服従する習慣」(DS 2) を身につけてしまっており、習慣通りにふるまうことで、責務に従う。こうした習慣の総体が「社会的生」(DS 2) を形成する。責務は「すでにそこにある」(DS 91) ものであり、後から課されるものではない。もちろん、知性をもつ人間は自らのふるまいや社会のありかたに自覚的であり、ときにはそれに抵抗することもありうる。しかし、出発点はそうした自覚的なレベルにはない。人間は割り当てられた役割に応じたふるまいをしているだけで、社会生活を送って

5 スペンサーとラマルク、あるいはネオ・ラマルキシズムの関係について Bowler (2015) を参照した。

しまっている (DS 12-3)。「義務への服従は、そのもっとも頻繁なケースに限っていえば、無頓着 *laisser-aller* あるいは身を任せることと定義されよう」(DS 13)。このように背景でほぼ意識されないまま働く責務によって、社会は成り立っている。

人間は個々の習慣から逸脱したふるまいをすることはできるが、「圧力」(DS 2)によって習慣へと連れ戻される。言い換えると、個々の責務に従わないことは可能であるが、そのときには「強制されていると感じる」(DS 2)。この強制力は、個々の責務が別個に存在するのでなく相互に支え合っており、「責務の全体」(DS 12)から権威を得ることに由来する (DS 3)。個別の場面は別として、生きること自体を考えた場合、人間は責務と無縁でいることができない。

以上のような責務のありかたは個人に対して外部から押し付けられるものではない。それどころか、個人は責務を通じた社会とのかかわりなしに孤立した状態では「平衡」(DS 7)を保つことができない。「自我はそれ自体が社会化されている」(DS 8)のである。責務に従い、そのことによって社会からの要求に応える習慣は、個人にとっての制約であるというよりは個人の構成要素であり、生きるための条件をなす。責務は内面化されている (DS 7)。

このように、責務は意識されるのに先立って課され、逃れがたく、内在的なものである。こうした責務が諸個人を結ぶ「紐帯」(DS 8)として働く共同体、諸個人とその総体とが不可分な形で支え合うありかたをベルクソンは「閉じた社会」と呼ぶ。それは生物学的起源をもち、自然によって与えられたもの、あるいは望まれたものである (DS 25) のだから、こうした社会のありかたはあらゆる時代、あらゆる場所に共通しているはずだ。したがって、社会とは一般的に「閉じた社会」という形をとる (DS 27)。

さて、ベルクソンが「閉じた」という語を用いる際には二つの含意がある。第一に、それは個人と社会の相互依存性、あるいは個人的であるこ

と社会的であることの不可識別性であり、個人が社会から与えられる責務に従ってふるまうことで社会の結束が維持されるという循環的なありかたである (DS 34)。第二に、それは排他性を指す。「閉じた社会」は「いつも一定数の個人を包摂し、それ以外の個人を排除する」(DS 25)。それだけではない。「社会的結束の大部分は、ある社会が他の社会から自らを防衛する必要性に由来する」(DS 28) のである以上、諸社会の間には「潜在的な敵意」(DS 55) が存在する。戦争は偶然起きるのではなく、そもそも社会は「戦争のために組織されている」(DS 295)。

『二源泉』において、第二のありかたは、第一のありかたから自然に理解されるものであるかのように導入される (DS 28)。しかし、両者のつながりはそれほど自明ではない。ここでは、ベルクソンが詳しく記述しなかったことを補いながら考えてみよう。

社会は諸個人が責務に従うという仕方ではか成り立たない。それを可能にするのは、自然を支配する法則と命令によって支えられる社会秩序との混同である (DS 4)。両者は相互に与えあう関係にある。すなわち「法則は命令の強制的な性格を手にする。命令は法則から不可避であるという性格を受け取る」(DS 5)。こうして、自然法則は命令を与えるものとして、社会秩序は必然的なものとして姿を現す。というよりむしろ、人間にとってはいずれも必然的かつ強制的なものと映る。責務が責務として、つまり人を従わせるものとして機能するのは、それがあたかも自然現象であるかのように必然性をともなって現れるからだ。

もちろん、人間の知性が発達するほど両者の区別は明確になる (DS 4)。しかし「通常、私たちは責務について考えるよりもむしろ責務に服している。」(DS 11) 多くの行動は、知性が作動し反省が開始される前になされてしまっている。「すべてが協力して」(DS 3, 6) この社会秩序と自然秩序の混同を押し進めることにより、社会生活というものは成り立つのである。

自然に比されるような必然性をもつためには、ベルクソンのいう「責務の全体」は「自らの秩序に従わない外部をもたないもの」という意味で

理解されなければならない。こうして、社会は「巨大なもの、あるいはむしろ無際限なもの」(DS 1)として姿を現す。したがって、あらゆる社会は、ただ存在するというだけで他の社会が存在することに対する脅威であり、障害である。社会は存続するために他の社会を敵視しなければならないし、潜在的な戦争相手とみなさなければならない。社会というものが責務を通じた諸個人の結合である限り、戦争への傾向は社会を成立させるために不可欠である。

社会秩序と自然法則の混同や潜在的な戦争状態は、特定の社会が示す特徴ではなく、社会というあり方そのものに内在する傾向である。そのため「閉じた社会」論にしたがえば、これらの点に関して、諸社会の間には程度の差異しかないことになる。この点は明確にしておこう。社会秩序と自然法則を混同する非知性的な社会と両者を区別する知性的な社会、好戦的な社会と平和を好む社会がそれぞれ本性上区別されるわけではない。どの社会でも、程度の差はあれ法や慣習をあたかも自然法則であるかのように扱ってしまうし、多かれ少なかれ社会の規律を「敵前での規律」(DS 27)と同一視してしまう。

さて、以上のような議論は、本稿の主題である獲得形質の遺伝とどのように関係しているのであろうか。実は、獲得された形質が規則的に遺伝することの否定は、「閉じた社会」論の前提となっており、これを絶えず確認するという仕方でない議論が進まなくなっている。そのことについては節を改めて論じよう。

第3節 獲得形質の遺伝と人間本性

「閉じた社会」がベルクソンの言うように自然によって望まれ形成されたものだとしても、したがって自然の手から離れたばかりの原初的な社会はすべて「閉じた社会」だったとしても、その後に人間の性質そのものが変わってしまったらどうだろうか。責務や戦争への傾向を通じた結束が失

われたら、人間の社会もまた大きな変化を余儀なくされるだろう。そのとき、社会は一般的に「閉じた」ものであるという議論は修正を迫られるし、『二源泉』の議論は現代社会の分析にはおよそ役立つでない「歴史的関心の対象」(DS 289)を追求したものに過ぎなくなる。

『二源泉』におけるベルクソンの目的は単に社会の起源を発見することではなかった。彼は自らの議論が「実践的にも役立つか」(DS 289)と問うている。そして、後に見る同時代の問題を解決するために利用しようとしている。しかし、そのためには一つの前提が確立されていなければならなかった。それは「人間の本性は変化しない」(DS 331)ということである。獲得形質の遺伝はまさにこの点にかかわる。

ベルクソンは、スペンサーの哲学がほぼ全面的に獲得形質の遺伝という仮説に立脚していると指摘していた。対照的に、ベルクソン自身の社会論はその否定に依拠している。こうした遺伝が規則的な仕方では生じないということと人間本性の不変性が同一視されるためである。

こうして、獲得形質の遺伝は『二源泉』における本質的な論点の一つ⁶となり、第三章を除く各章において執拗ともいってよい頻度で繰り返し言及されている⁷。いくつかの引用とともに、何が主張されているか確認してみよう。

…文明人がとりわけ原始人と異なるのは膨大な知識と習慣を蓄積しているためであり、文明人は意識が覚醒して以来、そうした知識や習慣を、それらが保存されていた社会環境から汲み上げてきたのである。自然的なものの大部分は獲得されたものによって覆われている。しかし、それらは太古の昔からほぼ不変なまま存続している。習慣と知識は、かつて想像されていたように有機体に染み入り、遺伝的に伝達さ

6 Bergson (2002), p.134.

7 DS 24-5, 27, 54, 83, 107, 117, 132, 167-8, 289-90, 321.

れるのではまったくない。(DS 24-5)

それは、獲得形質の遺伝を文句なしに受け入れ、信じるような道德哲学にとっては取るに足らないことだろう。〔この哲学の立場では〕人間は今日、遠い昔の先祖とは大いに異なる傾向をもって生まれてくることになるだろう。しかし、われわれはあくまで経験にとどまっている。この経験は身につけられた習慣の遺伝を例外とみなし、たとえ生じることがあっても、最終的に自然的性向を深く変化させるほど規則的かつ頻繁に起きる事実としては示さない。(DS 83)

文明によって獲得されたもののすべてが自然的なものを覆い、社会は誕生以来絶え間なく続けられる教育を通じて諸個人を形成する以上、この自然的なものが変形したかのように事が運ぶのは確かである。しかし、予想外のことが突然生じてこれらの表層的な活動を麻痺させ、そうした活動がなされる場であった光がわずかの間消え去るとしよう。すると、自然なものはすぐにまた姿を現す。変わることなく存在していた星が夜になると輝き出すように。(DS 168)

以上の議論をここでは次のようにまとめる。a 人間の具体的なありかたは社会によって大きく異なる。b それは、獲得された形質（習慣）が遺伝し、人間における自然的なものを変化させたためであるように見える。c しかし、実際にはそのような遺伝は例外的にしか生じない。d 変化の原因は獲得された習慣が蓄積し、自然的なものを覆い隠してしまっているためである。e 自然的なものは不変であり、機会が与えられれば元の姿を現す。

獲得形質の規則的な遺伝が生じないことを根拠として、諸社会の相違が人間本性の変化によるものであることが否定される。また、表層と深層という区別が導入され (DS 142)、変化は「知識や習慣」といった表層における蓄積という形でしか生じなかったこと、深層の本性は不変なままで

あり、表層の覆いが外れればいつでも姿を現すということが主張されている。

したがって「原始心性」のような、異なる社会に異なる人間本性を割り当てる概念は認められない（DS 106）。「停滞社会 *sociétés en stagnantes*」と「変動社会 *sociétés en mouvement*」（DS 134）といった区別はなされよう。だが、これらの相違は努力の有無、あるいは努力の必要性の有無でしかない（DS 142-3）。そして誰もが努力を欠く可能性がある以上⁸、これらの社会の間に本質的な差異は存在しない。

獲得形質の遺伝を認め、人間の本性が変化することを信じる立場からすると、現代でも戦争において人間が残酷にふるまうこと（DS 26, 305）や、「文明社会」のうちに迷信（DS 105）が残存していることは理解に苦しむだろう。しかし、これらは人間の本性（後者の場合、自然法則と社会秩序の混同）が変わらずに残存していると考えれば何ら驚くような事態ではない。

しかし、人間の本性が変わらないことを示すのは「閉じた社会」論の前提として必要だったためであり、いわば出発点に過ぎない。この議論を「実践的に」役立てるための作業があり、そこでも獲得形質の遺伝を否定することがある役割を担っている。

第4節 獲得形質の遺伝と楽観主義

ベルクソンによれば人間は個人として行動するというまさにそのことによって責務に従い、排他性を強めるような仕方では社会の結束を強化するためにふるまってしまう。こうした人間の本性は不変であり、そのままでは根本的な変化の可能性を持たないのだった。

8 ここでは、努力を欠くと不合理な判断や信念が増殖するということが述べられている。ベルクソン自身が努力を欠いた経験談が DS 158-9 に挙げられている。

以上のような社会観・人間観に従うと、限られた数の成員しか持たない「閉じた社会」は、そうした制限や排除の不在である「人類」と根本的に異なることになる。「私たちが生きている社会」(DS 28)は、「閉じた」ものである以上、いくら巨大になったところで人類にたどり着くことはない(DS 27-8)。

また、責務に従うことが可能であるのは人間の習慣の大部分が「服従する習慣」であり「大多数の人間においてあらわになる唯一の」(DS 296)傾向だからである。この傾向もまた人間本性に由来するのだとしたら、自由や平等、あるいはそれらに立脚する民主主義などというものはそのままでは成立しない。民主主義は「あらゆる政治的構想のうちで最も自然から遠く、少なくともその意図において『閉じた社会』の諸条件を超える唯一の」(DS 299)ものである。

しかし、人間はしばしば「人類に対する義務」(DS 26)を口にするし、自由や平等を少なくとももってはいる。民主主義が目指され、程度はともかくとして実現している。自然から生じたままの「閉じた社会」においては、こうしたことは生じようがない。したがって、何らかの形で決定的な変化が過去に起きたのでなければならない。

ベルクソンが「道徳的英雄」「神秘家」と呼ばれる人々を、そのような革新を先導する特権的人物として位置付けていたことはよく知られている。彼らは、一つの社会を維持するのは異なる原理で行動することができる創造的な人物である。彼らに憧れ、彼らを「模倣する」(DS 30)人たちは、「閉じた社会」のうちで制限されていた人間の思考や行動を押し広げていく。そうした「共通の意志」(DS 85)によって動かされ、特定の成員ではなく「人類全体を包摂する」(DS 34)ような共同体を、ベルクソンは「開かれた社会」と呼ぶ。

ベルクソンにとって、魂、道徳、社会の「閉じた」ありかたと「開かれた」ありかたとの差異は根本的である。『二源泉』において「閉じた社会」を一方的に断罪し、「開かれた社会」を称揚するような単純な議論が

なされているわけではないものの、後者のありかたに道徳的理想が見て取られていることは間違いない。だが、いくつかの点に注意する必要がある。「開かれた社会」は「理想的な極限」(DS 85)にすぎず、実現する見込みはない(DS 85, 97)。実際にありうるのはせいぜい「閉じた社会」における「開かれつつある」という傾向のみである。そして、「閉じた社会の諸傾向は開かれつつある社会においても、根絶不可能な仕方でも存続するように私たちには思われた。」(DS 307)言い換えれば、特権的人物やその追従者たちがもたらした変化は、人間の本性を不可逆的に変化させるようなものではないということだ。獲得形質の遺伝はこの点にもかかわっている。

道徳的獲得物は、諸習俗や諸制度、そして言語そのもののうちに沈殿する。次に、獲得されたものは不断の教育によって伝達される。こうして世代から世代へと受け継がれた獲得物は、ついには遺伝的なものと信じられてしまう。(DS 289)

今日、人間が自分を人類の一員であると考えることができたり、民主主義が程度の差はあれ定着したりしているのは、かつてもたらされた変化が習俗や制度、言語のうちに保存されたからに他ならない。そのような「道徳的獲得物」がどれほど革新的なものだったとしても、それは新たな人間本性になるのではない。しかし、獲得形質の遺伝に依拠すると「人間はかつての時代より優れたものとして生まれてくる」(DS 168)と考えてしまう。

こうした態度が「誤った自尊心 *amour-propre mal placé*」(DS 289-90)「傲慢」(DS 168)と映ることは間違いない。しかし、ベルクソンにとって真の問題はおそらく少し別のところにある。

『二源泉』、とりわけその第四章においては、同時代の問題への取り組みが強く意識されている。ここで問われているのは、悲惨を極めた第一次世界大戦の後で「戦争を根絶する」(DS 307)手だてである。既に見たよ

うに、ベルクソンは戦争への傾向を人間にとって本性的なものとみなしていたし、人間の本性は不変であると確信していた。したがって、そうした本性を変えるのではなく「抑制する、あるいは回避する」(DS 307) ことが重要になる。

ベルクソンが想定した偉大な人物たちは、そうした人間の本性を乗り越えることができる特権的な人間であり、その道筋を示してくれる存在である。しかし、彼らがすべての人間を道徳的によりすぐれた別の種にできるわけではないし、また事細かい指示を与えてくれるわけでもない。仮にそうした人物に直接的、あるいは間接的に影響を受けたとしても、実際に何をすべきかは各々が考えなければならない。「それ〔開かれた魂〕は努力を要求したし、常に要求している」(DS 35) のである。

『二源泉』の末尾近くになると「人類は、変容することを望む場合にのみ変容する」(DS 311)「人類の未来は人類にかかっている」(DS 319)「人類は自らの将来が自分自身にかかっていることを十分に理解していない」(DS 338) といった言い回しが頻出する。これらの表現が示唆しているのは、上記のような努力が少なくとも可能であるということに他ならない。

ベルクソンからすると、獲得形質の遺伝を信じる立場は、自然によって与えられた人間の生存条件を「遺伝の自動作用」(DS 168) によって乗り越えることができると気楽に考え、「真の功績は努力のうちにないかのように」(DS 168) ふるまう「浅薄な楽観主義」(DS 290) でしかない。『二源泉』において『進化』以上に執拗な形で獲得形質の遺伝が批判されたのは、読者に対して人類が差し迫った状況にあることを直視させるにあたり、こうした気楽さを何よりも先に退けなければならなかったからであろう。こうして、獲得形質の遺伝説に対する批判は、最終的には実践的な含意をもつのである。

結論

『二源泉』の刊行当初から、読者の反応は神秘家や神秘主義に関するものが中心だった。しかし、ベルクソンは同書の中で「特権的な偉大な魂の出現に期待しすぎないようにしよう」(DS 333)と呼びかけている。また、同書で提示される「本質的な改革の手段」は「英雄を待ち望むこと」だとしたロワジーの解釈を誤解だと退けている⁹。特権的な人物は(特権的な人物のみが)人間をその自然本性から逸脱するよう導いてくれるのは間違いない。しかし、本性はすぐに回帰するのであり、本性のうちには存在しなかった諸価値や様々な思考(自由、平等、人類、民主主義、戦争の根絶など)をそのたびごとに活性化したり新たに創り直したりする仕事は各世代の各個人に残されている。ベルクソンが人類の未来に見ていたであろう希望は、そのような努力が可能であるということのうちにある。反面、獲得形質の遺伝を受け入れる立場は、新たな世代がより優れた本性を備えて生まれてくると信じる立場でもある。ベルクソンが批判したのはその気楽さ、安易さだった。こうして、両者は未来の希望の持ち方において相容れないのである(もっとも、これはベルクソンの側からの位置づけである)。

参考文献

- Bergson, Henri. (2002). 'Une mise au point de Bergson sur *Les deux sources*' in Worms (2002), pp.131-142.
- Bowler, Peter J. (2015). 'Herbert Spencer and Lamarckism,' in Francis & Taylor (2015), pp. 203-221.
- Francis, Mark and Taylor, Michael eds. (2015). *Herbert Spencer, Legacies*, Routledge.
- Warterlot, Ghislain eds. (2008). *Bergson et la religion. Nouvelle perspectives sur*

⁹ Bergson (2002), p.134.

les Deux Sources, Paris, PUF.

Worms, Frédéric dir. (2002). *Annales bergsoniennes I*, Paris, PUF.

Worms, Frédéric. (2008). 'Le clos et l'ouvert dans *Les Deux Sources de la morale et de la religion* : une distinction qui change tout,' in Warterlot (2008), pp.45-63.

(にしやま・てるお 立教大学文学部兼任講師)

Critique de la théorie de l'hérédité des caractères acquis chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

Bergson a critiqué de manière persistante la théorie de l'hérédité des caractères acquis. Ce n'est pas uniquement parce qu'elle est insuffisante pour expliquer l'évolution biologique. Dans *Les deux sources de la morale et de la religion*, la portée de sa critique s'étend aux dimensions sociales et morales. Le but de cet article est de clarifier ses intentions et objectifs.

Les hommes sont liés les uns aux autres par les obligations et forment une société fermée. Cette société fermée est virtuellement en état de guerre les uns avec les autres. C'est là la nature humaine, et Bergson pensait que cette nature ne change pas. Par conséquent, pour reconnaître et pratiquer des valeurs qui n'existaient pas dans la société fermée, il faut suivre le chemin tracé par des individus exceptionnels et privilégiés et s'efforcer de créer quelque chose de nouveau par soi-même. D'un autre côté, ceux qui acceptent l'hérédité des caractères acquis croient que la nature humaine peut changer et que chaque nouvelle génération naît supérieure à la précédente. Pour Bergson, cette idée de progrès moral n'est rien de plus qu'un optimisme superficiel et néglige la nécessité de l'effort.

En fin de compte, la critique de l'hérédité des caractères acquis est liée à la question de la forme sous laquelle nous devons espérer pour l'avenir de l'humanité.